

# 台湾侵攻8

戦争の犬たち

大石英司

*Eiji Oishi*

## 立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～25頁までを収録したものです。

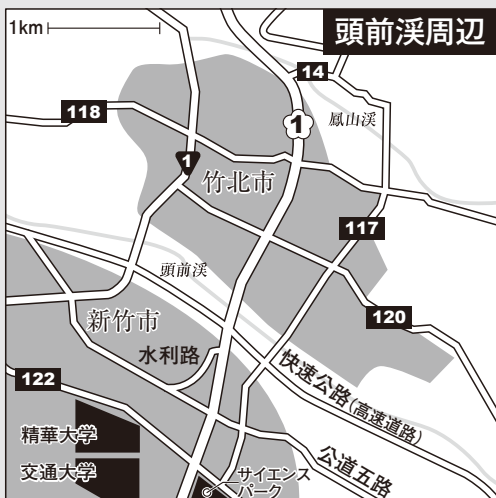
### ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

口絵・挿画  
地図  
平面惑星  
安田忠幸

目次

プロローグ	13
第一章 大隊編成	25
第二章 自爆ドローン	42
第三章 軍事教練	70
第四章 メディック	96
第五章 素人集団	119
第六章 デコイ	143
第七章 ケルベロス	168
第八章 脱出	196
エピローグ	213



# 台湾周辺地図



# 登場人物紹介

## ◆日本

### ●陸上自衛隊

《特殊部隊サイレント・コア》

どもんこうへい  
土門康平 陸将補。水陸機動団長。

〈原田小隊〉

はらだたくみ  
原田拓海 一尉。海自生徒隊卒、空自救難隊出身。

はたけともゆき  
畑友之 曹長。分隊長。コードネーム：ファーム。

まちだはるお  
待田晴郎 一曹。地図読みのプロ。コードネーム：ガル。

たぐちしんた  
田口心太 二曹。部隊随一の狙撃手。コードネーム：リザード。

ひがひろみ  
比嘉博実 三曹。田口のスポッターを自称。コードネーム：ヤンバル。

〈姜小隊〉

かんあやか  
姜彩夏 三佐。元韓国陸軍参謀本部作戦二課。

いかける  
井伊翔 一曹。部隊のシステム屋。コードネーム：リベット。

〈水陸機動団〉

しげひかる ヴィーナス  
司馬光 一佐。水陸機動団教官。コードネーム：女神。

《西部方面特科連隊》

ふなきいってつ  
舟木一徹 一佐。戦車隊隊長。

### ●航空自衛隊

・第三〇七臨時飛行隊

ひだかまさあき  
日高正章 空自二佐。飛行隊隊長。

しんじようあい  
新庄藍 一尉。F-15EX “イーグルII” 戦闘機で驚異的なキル・スコアを上げる。TACネーム：ウィッチ。

### ●日本台湾交流協会

よださとる  
依田悟 台北事務所参与。民間人。

### ●コンビニ支援部隊

こまちみなみ  
小町南 女子大生。中国語を勉強中のコンビニのアルバイト。

しもやまゆうすけ  
霜山悠輔 桜会のコンビニの助っ人。190センチ近い大男。

ちねん  
知念ひとみ 石垣島出身で流ちょうな英語を話せる。

## ◆アメリカ

### ●空軍

オリバー・R・エバンズ 空軍中佐。第18戦闘航空団の作戦参謀兼EXのインストラクター。

エルシー・チャン 少佐。ハワイ州空軍パイロット・中国系。

## ◆中国

### ●人民解放軍総参謀部

任思遠 海軍少将。総参謀部作戦部特殊作戦局局长兼特殊戦司令官。

### ●陸軍

張偉森 陸軍少佐。調達部門の仕官。

董衍 ドローンの設計が得意で航空工学の修士号をもつ。

董慶磊 プログラミングが得意。

董養飛 工作が得意で、フィギュアの原形師が趣味。

### ●海軍

#### 《南海艦隊》

東曉寧 海軍大将（上将）。南海艦隊司令官。

賀一智 少将。艦隊参謀長。

#### 《東海艦隊》075型強襲揚陸艦二番艦「華山」(40000トン)

唐東明 海軍大将（上将）。東海艦隊司令官。

馬慶林 大佐。東海艦隊参謀。

#### ・KJ-600（空警-600）

浩菲 海軍中佐。空警-600のシステムを開発。

葉凡 少佐。空警-600機長。搭乗員六人のうちの唯一の男性。

秦怡 大尉。副操縦士。電子工学の修士号を持つパイロット。

#### ・J-35部隊

火子介 海軍中佐。テスト・パイロット。

#### ・Y-9X哨戒機

鍾桂蘭 海軍少佐。AESAレーダーの専門家。

#### 《第164海軍陸戦兵旅団》

姚彦 海軍少将。第164海軍陸戦兵旅団を率いる。

雷炎 大佐。旅団作戦参謀。天才軍略家の異名を持つ。

程帥 中尉。技術将校兼雷炎大佐副官。

### 〈別働隊大隊〉

フアオホーピン  
曹 和平 大佐。別働隊大隊指揮官。

### ●上海国際警備公司

ワンカイ  
王凱 陸軍中佐。隊長。

フオジン  
火駿 少佐。副隊長。

リウロン  
劉龍 曹長。通信担当。

バイシンヨウ  
白心悠 伍長。部隊で唯一空挺降下に成功した女性兵士。

## ◆台湾

### ●陸軍

#### 〈第6軍団〉

フアイイーレイ  
蔡 怡叡 中尉。司令部付き通信仕官。

#### 〈第10軍団〉

ユンミン  
余明敏 陸軍中將。第10軍団司令官。

ライルオイン  
賴若英 陸軍中佐。作戦参謀次長。

#### 〈陸軍第601航空旅団〉=別名〈龍城部隊〉

ロンチャン  
藍志玲 大尉。戦闘ヘリ・パイロット。コールサイン：マリリン。

ティエンズーユイ  
田子瑜 少尉。新米仕官。藍志玲大尉と前席射撃手として組む。

#### 〈第99旅団〉=〈鐵軍部隊〉の愛称をもつ

チェンヂーウェイ  
陳智偉 陸軍大佐。一個大隊を指揮する。

ホアンジュンナン  
黃俊男 中佐。作戦参謀。大隊副隊長。フログマン部隊出身。

ワンイーシェ  
王一傑 少尉。台湾大学卒のエリート。予備役将校訓練課程出身。

リウジンロン  
劉金龍 曹長(上士)。コードネーム：ドラゴン。

ヤンヂーミン  
楊志明 上等兵。コードネーム：アーティスト。

### ●独立愚連隊

チェイツォーチャオ  
柴子超 伍長。コードネーム：ヘネシー。アルファ小隊を率いる。

グオイー  
郭宇 伍長。コードネーム：ニッカ。ブラボー小隊を率いる。

ホーシヤン  
賀翔 二等兵。コードネーム：ドレッサー。

フイチャオ  
崔超 二等兵。コードネーム：ワーステッド。

### ●その他

#### 〈桃園の郷土防衛隊〉

リーグワンション  
李冠生 陸軍少将。金門の烈嶼守備大隊の指揮官を歴任。

ヤンシーグ  
楊世忠 少佐。軍歴三十年で孫もいるベテラン。

ワンウェンション  
王文雄 海兵隊少佐。台日親善協会と国民党の対外宣伝部次長。



ガオフイカン

高慧康 医師。高文迪の父で外科医。

〈国土防衛少年烈士団〉

よだけんすけ

依田健祐 父親は日本台湾交流協会参与。私立中学校（国民中学）の生徒。

ガオウエンディ

高文迪 依田健祐の親友。外科医の父を持ち、クラスのリーダー格。

ルイー

呂宇 私立中学校（国民中学）の数学教師。



台湾侵攻 8 戦争の犬たち



## プロローグ

人民解放軍東海艦隊司令官の唐東明<sup>タンドンミン</sup>海軍大将（上将）と艦隊参謀の馬慶林<sup>マチンリン</sup>海軍大佐を乗せたZ・18（直昇18）大型ヘリコプターは、漳州<sup>ジャウジヨウ</sup>空軍基地へと向かって、いったん沿岸部から離れて内陸側の飛行コースを取っていた。

向かう先の漳州空軍基地は、台湾攻略のために、ここ数年重点的に整備拡大された基地だったが、今は機能停止状態だった。

日台両軍戦闘機部隊によるミサイル攻撃を受け、沿岸部の軍事基地が手酷い損害を出していた。

復旧活動はすでに始まっていたが、戦闘機部隊を常駐させての運用はほぼ不可能だろうと判断さ

れた。少なくとも、沿岸部の制空権を完全に取り戻すまでは……。

へりは、あまり高度を取らずに飛んでいた。所々雲が出て、山々の稜線が見えなくなる。時々、その稜線の下へと降りて、谷筋を飛んでいる。決して安全な飛行ではなかった。だが、敵戦闘機がいつまた襲ってくるかも知れないのだ。

艦隊の飛行隊の中でも、えり抜きのパイロット・パイロットが操縦している。それに、雲があるとはいえ、昼間だ。

馬大佐は、パイロットの技量を信じていたが、コクピット越しに外の景色を見るのは止めた。だ

が、キャビンに差し込む光で、ヘリが右へ左へと針路を変えながら飛んでいるのはわかった。

憂鬱なフライトだった。ミサイル攻撃を受け、浅瀬に座礁して黒煙を上げる駆逐艦の様子を確認してしばらく海岸線に沿って飛んだが、攻撃からすでに六時間以上経過しているにもかかわらず、まだあちこちで煙が上がっていた。その全てが軍事基地だった。

夜明け前の最も暗い時間帯を狙って行われた攻撃は徹底しており、台湾海峡沿いのレーダーサイトは潰滅、空軍飛行場、海軍の飛行場も軒並み攻撃を受けた。

その攻撃に対して、味方部隊は全くの無力だった。為す術もなく、数十箇所軍事基地が攻撃を受け、軍艦も数隻が沈んだ。

敵は連日、攻勢に出ている。その前の日は、台湾海峡の制空権奪還作戦が敢行され、台湾空軍は

大きな犠牲を払いつつも、こちらの早期警戒機や空中給油機を多数葬り去った。こちらも、刺し違えつつ台湾に空挺を送り込めはしたが、どちらが勝ったかは明白だった。

もちろん、人民向けには、われわれは着々と、台湾奪還へ向けて確実に歩を進めていることになっている。人口分布で言えば、台湾のすでに九割の都市を占領していることになっていて。全くの嘘ではなかったが、事実とはほど遠い状況にあった。

海軍に出番は無かった。というより、良い所は全く無かった。沿岸部の奥まった場所に引き籠もったまま。軍内部では、引き籠もりを意味する家<sup>キャット</sup>蹲海軍と揶揄されていた。

全く気が滅入る状況だった……。

ヘッドセット付きの航空ヘルメットを被った唐提督は、壁際に設置された横向きの座席に座って

いた。馬大佐は、一席空けて座っていた。向かいには、衛星通信機を抱えた通信士官が座っている。機内で少し打ち合わせが出来ればと思っていたが、とてもそんな雰囲気では無かった。だが、かといって提督が沈んでいるわけでもない。その心中はわからないが、何にせよ、滅多に表情には出さない男だった。

機外で何かが光ったような感じがした。すぐさま、エンジンの振動が変化したのを大佐は感じ取った。

コクピットで怒号が飛び交っていたが、何を喚いているのかはわからない。だが、機体が危険な状況に陥っていることはすぐわかった。機体がぐるぐると水平方向へと回転し始めたせいで、差し込む陽の光もゆっくりと回転し始めた。加速度が身体を締め付け始める。

「不時着に備えて！——」

と機長がキャビンの客へと怒鳴った。

馬大佐は、提督のシートベルトが締まっていることを確認した。どこかに掴まりたいが、そんなものはない。肘掛けがあるわけでもないの、仕方無く、両腰のベルト部分を掴んだ。

更に横への回転が激しくなる。恐らくテールローターを殺られたのだろう。引き金は何だろう、と大佐は思った。ミサイル攻撃なら、今頃吹き飛んでいる。たぶんエンジン部分の問題だろうと思つた。この機体は燃料を満載している。不時着したらすぐ火が回るだろう。

ヘリコプターがどんな原理で飛んでいるのかさっぱりわからない。マサチューセツツ工科大で研究生を送ったこともある馬は、理系人間としてそれを理解しようとは勉強したことがあるが、さっぱりわからなかった。人が鳥の真似をするのは傲慢だ……。

マイナスGが加わる。機体は辛うじて飛んでいたが、急速に高度を失っていた。

「衝撃に備えろ！——」

次の瞬間起こったことは、とうてい「不時着」とは言い難い現象だった。一瞬、空間が縮んだような錯覚を覚えた。巨人の手の中で、自分が押し潰されたような感覚だった。

腰のベルトが内臓に食い込んでうめき声が上がると、前方に座っていた兵士の肉体が、宙に浮いたように見えた。自分の航空ヘルメットで、後ろの壁を打ち破るかのような衝撃を受けた。

しばらく呆然としていたが、整備の機付き長が立ち上がり、「大丈夫か！ 大丈夫か！ 脱出だ！」とみんなに呼びかけている。

馬大佐は、食い込むベルトを外そうとしたが、バックルがなかなか開かなかつた。ベルト・カッターを持った機付き長が駆け寄る。変な格好だっ

た。機付き長が真上から覗き込んでいる。機体が横倒しになって、馬大佐は、今、壁ごと地面に横たわっていた。

機付き長がベルト・カッターでベルトを切り裂く。

「提督を先に！——」

「ええ、大丈夫です。ご無事です！」

提督は、四つん這いになって、機体後部へと向かっていったが、ハッチ部分が歪み、開きそうには見えなかった。かと言って、この大型ヘリでは、今は天井になっている右翼側のハッチから脱出するのも難しい。そこまで手を伸ばしても届かない。乗組員が機体底面に設けられた脱出用のハッチを開けようとしていたが、それも無理そうだった。油の臭いが立ちこめてくる。

コクピットでは、パイロットが脱出しようとして足掻いていた。副操縦士が、右足のブーツで、キャ



ノピーに激しく蹴り込んでいた。

「コクピットから出るぞ。急いで下さい！」

とパイロットが怒鳴っていた。

唐提督をまず脱出させてから馬が続く。どこか山間部の畑のようだ。機長は、まだ自分のシートに縛られたままだった。足が挟まっている様子だった。

「機長を出してやれ！」

と馬大佐は命じながら、機体から転がり出た。

すでにエンジン部分から火が出ていた。

「提督、離れて！ 爆発します」

副操縦士が再び機内へと戻り、機付き長と二人で機長を抱えて引っ張り出そうとしていた。機体はすでに炎に包まれ、一回小さな爆発を起こしていた。だがその爆発の衝撃が、奇跡を起こした。機体に挟まれていた機長の足が抜けたのだ。

全員が脱出した後、二度目の爆発が起こった。

今度は、機体全体を包む爆発で、千切れたローター・ブレードが宙を舞うほどだった。

一〇〇メートルほど離れたあぜ道に出て、土手に座り込んだ。乗り込んでいたのは、整備クルーも含めて八名だった。副操縦士が全員の無事を一人一人確認する。機長は、右足を骨折して痛みに耐えていた。明らかに開放骨折で、鮮血が飛行服に滲んでいた。

機付き長が手早く手当を始めていた。

上空を味方の爆撃機が通過した。通り過ぎるかと思ったが、低空で引き返してくると、誰かがパラシュートで飛び降りた。

パラシュートを操縦して、こちらに降りて来る。白い防護服を身に纏った兵士が、彼らから一〇〇メートルほど離れた場所に着地した。パラシュートの操縦に慣れている感じだった。銃は無く、腰の辺りにオレンジ色の救命箱を縛り付けていた。

ゴーグルにマスク姿で、嚴重な感染防止策を取っていた。パラシュートのハーネスを解除してキヤノピーを素早く畳んで抱きかかえると、こちらへ歩いて来た。

土手に座り込む集団に一〇メートルほどの距離を取り、自分が風下側にいることを確認してから、男はゴーグルとマスクを取って敬礼した。

「全員ご無事ですか？ 医療的手当が必要な者は他にいませんか？」

「間に合っています。幸い、救命バッグを持ち出す余裕はあった。それより、どうして貴方がこんな所に？」

と馬大佐が応じた。階級章はどこにもないが、こんな所で遭遇するには、ちとバツの悪い相手だった。

人民解放軍総参謀部作战部特殊作战局局长兼特殊战司令官の任思遠<sup>レンシユエン</sup>海軍少将は、抱えたパラシ

ュートを足下に置くと、「偶然です」と答えた。

「海南島<sup>ハイナンダオ</sup>から北京へ戻る途中に、皆さんのヘリが撃墜される所をたまたま目撃しまして」

「撃墜？ いやあ、エンジン・トラブルではないのか？」

唐提督が、そんなはずはない……、という顔で尋ねた。

「いえ、先行する輸送機の無線を聞いた限りでは、攻撃だそうです」

「では当たり所が良かったな。ミサイルなんぞ喰らって不時着なんて普通は出来ない」

「ものは、空対空ミサイルではなく、たぶん、歩兵が担ぐ肩撃ち式ミサイルでしょう。つまりMANPADSです。弾頭威力は限られる」

「そんなバカな。ここは海岸線から何十キロも内陸部に入っているんだぞ。こんな所に、敵の兵士が潜入しているというのかね？」

「われわれだって、あんなに警戒嚴重な台湾に武装工作兵を潜入させています。こんなに広大な大陸に対して、それが出来ないということはないでしょう。提督を乗せた大型ヘリは、旗艦を発艦した時から、敵に追尾されていた。あとは、経路上に潜んでいる工作兵に、命令を出すだけで済む。不可能なことではない」

「われわれは陸地の制空権も失ったのか……」

「感染を拡大させる恐れがあるので、山狩りの類いは難しいでしょうね。無線機はありますか？」

「一応、衛星携帯も持って降りました。提督座乗機撃墜の報せはすでに報告済みのはずですが……」

提督に同行させた通信士官はすでにシステムを立ち上げていた。

「君は、海南島で例の研究を視察して来たのだから？」

「はい。その報告を北京へ急ぎ持ち帰る途中でし

た。皆さんには、より一層の犠牲を払ってもらうことになりそうです」

「上手く行きそうなのかね？」

「理論上の説明は受けましたが、研究者自身は成功すると。自分は聴いたままを報告するしかありません」

「君もまたとんだ貧乏くじを引かされたものだな。科学者でもないのに。上の連中は、はなから、できませす！」という報告しか期待しとらんだろうが」

任は軽く生返事するに留めた。

通信士官が、南から飛んで来るヘリと連絡が付き、そのままそこで待てということになった。

「北京の様子はどうだね？」

「八一大樓パライタータワーはかなり酷いですね。感染者が出て、ほとんど機能不全に陥っている。自分らはその前に、例の地下軍事司令部に移動していましたが、

「あちらでも感染者は出ました。一応、封じ込めてはいますが、今は三時間置きに検査を受けています。感染者はバタバタ死んでいくそうです」

「私が聞いたのは、疫病のことではなく……」

任少将は、マスクをすると、五メートルほどに近づいて、唐の問いに答えた。ただし遠回しに答えた。

「空母一隻の犠牲には耐えられるかも知れない。でも、三隻も沈められたら？ それでなお、台湾を制圧できなかつたとしたら、われわれは立ち直れない。政権の浮沈に関わることです。海軍が無事な内に、交渉のテーブルに就くべきだという考えもあるようですが、自分はいかなる意見も持ち合わせません。幸い、そういう立場にはおりませんので」

Z・18（直昇18）ヘリが接近して来ると、旋回しながら高度を落とし始めた。あぜ道を挟んで、

山側ぎりぎりの畑の上に着陸する。

何の畑かわからないが、今は端境期なのか、雑草が生えているだけだった。

南海艦隊司令官の東暁トシヤク海軍大将（上将）と、艦隊参謀長の賀一智ホウイチ海軍少将が降りて来る。二人とも、肩にパイプ椅子を提げていた。続く部下達も、椅子や折り畳みテーブルを持っている。

相変わらず用意周到な奴だと唐提督は思った。

「やあ、唐同志よ！——」

と東大将は呼びかけた。

「どうせ空軍基地では机も椅子ももう灰になった後だろうと思つてな、これを積んで来て良かったよ。だいたい、あんな燃え上がった基地で会議を開けというのは、嫌みな命令だよな。お前達がサボったせいで起きた悲劇の中に身を置いて話し合えとか。こういう所での青空会議も悪くない。だが、この鳩首会談は二〇分が限界だそうだ。それ

以上居座ると、敵に察知されてミサイルが飛んで来るだろうと」

畑のど真ん中に、折り畳みテーブルと、パイプ椅子が置かれた。なんとも奇異な光景だった。そのパイプ椅子に、海軍の提督や大佐が座って向き合っているのだ。

「こんな所ですか？」と唐提督が洪々と応じた。

「われら家里蹲海軍には地面の上だというだけで十分だろう。ところで、君の所で不遇を託っている艦隊参謀長はどうしたのだね？」

「彼は、陸上に留め置いたせいで、MERSに感染して、今病床にある。助かるかどうかは微妙な所らしい。そっちは大丈夫か？」

「いや、こっちは駄目だなあ。湛江市ジャンジャンと言って

も、ああ海南島に近いとな。全国からリゾート客が押し寄せる。そこいら中で感染者が出ている。司令部の留守部隊も大分感染者を出しているよ。

ところで任少将、北京から、どこで油を売っているんだ、さっさと戻って来い！ との命令だぞ。なんで降りた？」

「ただの保身ですよ。自分としても、気乗りしているわけではないことをお伝えするためです」

任提督は、そのテーブルの風下の位置から答えた。

「あの注文の多い博士の研究か？ 海軍もいろいろ援助して来たがな、大規模実験は二年後だという話だったぞ。成功するとは思えないが……。氣象工学もいつかはものになるだろうが、せいぜい半世紀後の夢物語だろう。せめてわが南海艦隊が日本のイージス艦隊と直接相まみえる機会があったなら——」

「おいおい。それを言うなら、南海艦隊の完全包囲下にあった東沙島ドンシャードオで、台湾軍の完璧な脱出を許した君たちの方がケチの付き始めだろうに」

唐大将が反論した。

「その日本の潜水艦に、その後、何隻もの軍艦を沈められた不運な男に言われたくはないな」

任少将は、二人にはつきりとわかるよう、困惑した顔をした。

「気にするな少将。われわれは士官学校の頃からこういう仲だ。北京に戻ったら、二人の司令官は、若十の意見の相違を認めつつも、腹をくくったようだ、と伝えれば良い」

「それでよろしいのですか？」

と任は唐提督に聞いた。

「戦力の八割はまだ無事だ。それでどうなるとは思えないが、手を打っていないわけではない。戦力を保持しつつ敵に一矢報いる作戦を考へるさ。そうするしかないのだから。ロシアがあんな無様な戦争をしでかした後に、われわれがそれを真似るわけにはいかん」

小型ヘリのローター音が聞こえていた。

「君一人を近隣の無事な飛行場に運ぶために、わざわざヘリを呼んだ。撃墜されずに北京に戻ってくれ。あと、陸軍は、台湾正面の陸地くらいきちんと守れともな。こんな内陸部を飛んでいるのに、森の中からミサイルを撃たれたんでは叶わないぞ。われわれは、二万もの将兵を無傷で上陸させたが一瞬で全滅した。あの兵力が生きておれば今頃、台北の占領も夢では無かったのに、ひとり海軍の責任にされるのは迷惑だともな」

唐提督が、同意する印に二度頷いた。人民警察のZ・11ヘリが現れて、だいぶ離れた路上で着陸態勢に入った。

そのヘリ以外は、至って静かだった。場所を考えると、防空任務に当たる戦闘機の爆音くらい聞こえるはずだが、空に味方機はいなかった。

「では、自分はこれで失礼します。移動にはくれ

ぐれもお気をつけ下さい。敵は、そのへりに誰が乗っているかを把握した上で、攻撃の可否を決定していると考えるべきです」

任少将が敬礼し、その場を去ると、東大將は、ライバルの隣に座る馬大佐を見遣った。

「大佐、私に何か言うことはないかね？」

「提督、率直に申し上げますが、自分は海軍の、部隊全体の奉仕者です。そもそも、リゾート生活が出来るのに、南海艦隊参謀の地位を棒に振るなんて馬鹿げたことはしません。自分はただ、軍学校での教鞭も執っているのです、やむなく東海艦隊参謀の地位に収まっただけのことです」

「南海艦隊が人材難だとは初耳だなあ。なあ、賀少将？」と唐大將が話を振る。

「参謀人事の話になるたびに、釣り逃した魚の大きさの話になりましたな。そりゃ、うちにも米留帰りの参謀の一人くらい欲しいことは事実です」

「さて、人事の噂話でお茶でもしたい所だが、そろそろ本題に入らないか？　すでに一〇分は無駄にしたぞ。それに、敵のコマンドは直ぐ近くに潜んでいる」

唐大將が本題へと舵を切った。

人民解放軍の東沙島電撃上陸占領から、すでに二〇日が経過していた。島嶼を巡る戦いは、尖閣諸島へと飛び火し、解放軍は、寡兵で迎え撃った自衛隊をあと一步の所まで追い詰めた。だが、自衛隊はこれを持ち堪え、戦争は遂に、解放軍の当初の目的、台湾上陸へと移った。

作戦当初、二万もの陸兵の上陸に成功したが、台湾軍はこれを四方八方から野砲で叩き、一瞬にして潰滅させた。

別働隊が台北と目と鼻の先に上陸し、これは奇襲攻撃となつて台湾軍を動揺させたが、これもあ

と一步の所で撃退された。次に解放軍は、第2梯団を台湾南部に上陸させ、ホバーバイクとキックボード部隊で台湾軍を翻弄し、徐々に支配エリアを拡大して行った。

台湾各地で一進一退を繰り返していたが、都市部に於いて九割を支配下に置き、無傷なのは今や首都台北くらいのものであった。

ことここに至り、日本は台湾支援のために、自衛隊の参戦と派遣を決定、陸自水機団部隊が、台湾南部の高雄ガオシヨンスズオイン左營に上陸し、台湾南部から解放軍の一掃を開始していた。

だが、解放軍は、台湾第二の都市である台中タイジョン市の非武装都市宣言化に成功し、台湾半導体製造の拠点である新竹市シンチュウにも足がかりを築いて戦闘中だった。

対する日台両軍は、台湾本土の制空権を完全に奪還し、今や、台湾海峡の航空優勢も確保しつつ

あったが、それもこれも、中国海軍が、撃沈を恐れて沿岸部に引き籠もっているお陰だった。

今また、沿岸部の解放軍の飛行基地やレーダー・サイトを破壊されたことで、中国軍は不利な状況に陥りつつある。台湾に上陸して戦闘中の部隊を支援するためにも、新たな、そして決定的な作戦が必要だった。



## 第一章 大隊編成

陸上自衛隊特殊作戦群第一空挺団・第四〇三本部管理中隊、その実、特殊部隊である。サイレント・コア<sup>はらだ</sup>の原田小隊は、台北から南西に離れた桃園市<sup>タオユエン</sup>に展開していた。

そこから南へ下ると、新竹市だ。敵はすでにここ桃園にも潜入し、夜間になると仕掛けてくる。

日中の攻撃は、今の所なかったが、それも時間の問題だろうと思われた。

敵の目的は、台湾の空の玄関、桃園空港の制圧だ。だが台湾軍には余力が無く、ここを寡兵の郷土防衛隊だけで守っていた。

そして、新竹を巡る状況は混沌としていた。解

放軍はここを制圧できていなかったが、台湾軍も守り切れているとは言い難かった。敵味方があまりにも交錯し、台北でも戦況を把握しかねていた。原田小隊は、31号線に沿って走る高速鉄道の高架下をばらけて徒歩移動していた。準備が整った部隊から、トラックに乗り込み出発する。

ドローンに目撃されるのを避けるため、全部隊が、線路の高架を挟んで走る高速の中央分離帯部分の橋脚部分に隠れていた。

厄介な状況だった。彼らは、公式にも非公式にも存在しない部隊だ。他の部隊と行動を共にすることも滅多にない。だが今、彼らには、大隊規模

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。